

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「1学期の成果と課題」～支援員の先生の声～

〈成果〉 ※ゴシック体は私のつぶやき

- ①子どもが落ち込んだとき、「気にしない気にしない」など、気持ちが明るくなる言葉掛けをしたら、以前より気持ちが安定した。(言葉には、思考と気持ちを切り替える力がある)
- ②授業中に子どもが好きなことを話し出したときは、注意を促し、今やることを伝え、その分、休み時間に聞くことで満足感を得ている。(今はできないけど、いつだったらできることを伝えると子どもは安心する)
- ③身の回りの整理整頓ができるように、①声を掛けて一緒にやる→②半分手伝う→半分は自分でやる→③声を掛けて一人でやる→④離れて様子を見守るなど、やり方を変えることで一人でできるようになった。(課題を分析して、できることからスタートして支援を減らしていく。スモールゴールを増やしてラストゴールへ！)
- ④イライラして課題に取り組まないときには、少し時間をおいたり、場所を変えて気分転換を図ったりすることで落ち着き、再度やってみようとする姿が見られるようになってきた。
 (「先生が帰ってくるまでに〇〇しておいてね」と、切り替え猶予を提示して、その場から離れて刺激を与えない、少し時間がかかっても一人で切り替えができれば認める)
- ⑤業間や昼休みに行動を共にすることで、コミュニケーションの幅が広がり、新学期よりもぐっと信頼関係が増した。その結果、1回の助言で指示が通るようになった。(子どもと楽しい時間や場所、できなかったことができるようになったことなどを共有できると、心の距離が近くなる)
- ⑥中学校は教科担任制なので、対象生徒の様子を担当に伝えたり、休み時間にやらなくてはいけないことを声掛けしたり(場合によっては手伝ったり)した結果、周りの生徒も助けてくれる機会が増えた。(支援員は、子どもに一番近い存在であり、支援対象児と周囲の子ども・教材・担任・保護者をつなぐ役割を担っている)



〈夏休み明けから実施したい支援〉

- ①グループ学習では、友達の橋渡しをして友達との交流を増やす手助けをしていきたい。(ペア学習やグループ学習は、支援員とではなく、友達同士とできるような仕掛けをする)
- ②子どものよいところや頑張りを自分だけがほめるのではなく、他の先生からもほめてもらうことで自信につなげ、次の意欲につながるようにしたい。(人は同じことを3回ほめられるとその気になる！)
- ③困っている様子が見られたときは、話を聞いたり、自分から周囲の友達へ協力を求めたりできるようにしていきたい。(困ったときに、「助けてください、教えてください」と自分から援助を求められるようになると、生きやすくなり、気持ちが楽になる)
- ④子どもからヘルプを出してもらえる支援員になれるよう信頼関係を築いていきたい。(「この先生と一緒になら安心できる」と思える良好な関係を築くことが支援に影響する)

〈悩んでいること〉

- ①自分の行っている支援がこれでよいか、いつも不安である。
 → 「個別の指導計画」を基に、学級担任と目標や手立てを共有しながら支援に当たる。また、特別支援教育コーディネーターが中心となり、定期的に支援員との情報交換の場を設定し、子どもの変容と支援内容を評価する。支援の成果は、支援を要する人と支援をする人の思いを掛けたもの。どちらかが小さかったり、ゼロだったりすると成果は期待できない。不安を力に変えてほしい。

②子どもが少しでも自立できるように、何を、どれくらい、どのようなときに支援をしたらよいか、加減やタイミングを知りたい。

→ 自立とは、子どもが最小支援で最大の力を発揮すること。

- ・支援を減らそうとしているか。
- ・不必要な支援をしていないか。
- ・一人でできる状況づくりをしているか。



三つの視点から支援内容、加減やタイミングを見直す。答えは子どもがもっているもので、良好な信頼関係を築きながら、失敗しても一人で起き上がる経験を増やす。

③感情のコントロールができなくなっているときの子どもへの声掛けのタイミングや見守ったらいかの判断が難しい。

→ その場での対応よりも、事前指導に力を入れる。調子のよいときに、イライラしたときの対処法（深呼吸をする、数える、水を飲む、おまじないを唱えるなど）について確認して、イライラを鎮めるリハーサルを行う。

パニックになったときは、刺激の少ない場所でクールダウンをする。あまりにも興奮しているときは、その場で子どもを座らせる。床にお尻をつけさせると、余計な力が抜けるので、移動しやすくなる。安全面に配慮するが、優しい言葉を掛けたり、好きな物を与えたりせず、落ち着くのを待つ。

④学習が定着しない子ども（知的発達が遅れが疑われる子ども）への支援方法を知りたい。

→ 境界領域知能の子どもの特性 ※IQ70～84くらいまで（7人に1人）

- ・身に付くまで時間がかかる。 ・記憶する量が少ない。（記憶してられる時間も短い）
 - ・能力以上のことを要求されると、不適応行動が出現しやすい。
 - ・実際的な生活経験が不足しがちになる。 ・人に頼る。（分からなくても「はい」という）
- 「レベルに合った課題を細かく、少なく 体験的な学習方法でゆっくり・ていねいに」

⑤こだわりへの対応を知りたい。

→ 活動に影響がない、他に迷惑をかけていないときは許容する。身体を傷付けている、他の迷惑になっているときは、対応策を考える。

→ 認めて共感する、予定変更は理由を添えて早めに知らせる、条件を付けて許容範囲を設ける（〇時まではOK、この場所はOK等）、最初にルールを決める（セーフとアウトライン）、こだわりを利用する（水遊びを拭き掃除へ）、新しい価値観を指導する（負けても泣かない、負けても友達を応援する）

→ 大人がこだわらない、巻き込まれないようにする。



「子どもへの対応の原則8」～問題行動を減らそう～

- 1 問題行動をなくす支援から起きない支援を考える
- 2 事前にルールを決めておく（予防的な対応、ほめる）
- 3 禁止するときには、どうすべきかを教える
- 4 視覚的・具体的・肯定的に示す
- 5 刺激や情報を制限・遮断する
- 6 言葉だけでなく、行ってみせる
- 7 子どもの目線で見たり感じたりする（なぜ？）
- 8 叱らないけど、譲らない態度をとる



子どもは困っているから行動します。子どもの行動は、「困っていること」を探る手掛かりになります。子どもの行動を「問題」ではなく、「支援の手掛かり」と考えると、子どもは大人を信頼します。どんな行動にも意味があります。子どもの気持ちに目を向け、理由を探ると答えが見付かります。「支援は、本人に聞く！」